

『菅ヶ原家のアブナイ兄弟』

著：森本あき

ill：明神 翼

「ただいま...」

小さくつぶやいて、家の中に入った。すでに、みんな、自分の部屋に戻っているだろう。そのほうがいい。これ以上、今日は何もしたくない。

「お帰り」

なのに、そんな声がした。羽宮は、びくっ、と体をすくませる。

そこには、春宮が腕を組んで立っていた。

「ああ、春宮」

羽宮はどうか笑顔を張りつけた。千夏にふられてしまったことを、悟られるわけにはいかない。

羽宮には大事な彼女がいる。誕生日パーティーに連れてくるほど、きちんとつきあっている相手だ。

そのお芝居をつづけなければ。

「プレゼント、もらうぞ」

春宮が羽宮に近づいてきた。羽宮は一步、後ずさる。

「だから、プレゼントは買ってないって...」

「買わなくていい」

春宮がにやりと笑った。

「おまえが持っているものをもらおう」

トン、と首の後ろを軽くたたかれる。

つぎの瞬間、羽宮は、すーっ、と意識を失った。

3

まぶしい。

うっすらとまぶたを開いて、そう感じた羽宮は、手のひらで目を覆おうとする。だけど、手が途中で止まってしまった。

なに...？

羽宮はもう少し目を開けてみる。明るすぎるほどの光が、目に痛い。ハレーションを起こしたみたいに、全体が白くぼやけている。

なんで、こんな明るいところにいるんだろう。羽宮の部屋には、こんなに強い光量を放つものはない。...ていうか、ぼく、どうしたんだっけ？

羽宮が記憶をたどろうとしたところで、遠くとも近くともわからない場所から声がかかった。

「起きたみたいだな」

エコーがかかったようでも、聞きまちがえるわけがない。

春宮だ。

「春宮...？」

羽宮は小さく呼びかけた。だけど、返事はない。

「春宮？ ねえ、春宮、ぼく、なんでここに...」

そこまで問いかけてから、すべてを思い出した。玄関で、春宮に気絶させられたのだ。

羽宮は、がばっ、と飛び起きようとする。

逃げなきゃ！

心の中は、その気持ちでいっぱいだ。

春宮と二人きりになるわけにはいかない。答えを出せ、と迫られるに決まってる。

なのに。

ガシャリ。

そんな音が響いた。体も半分ぐらいしか起き上がらなくて、手が引っ張られている感覚がある。

どうしたんだろう。

不審に思いながら、羽宮は自分の手を見た。そこには銀色の輪っかがはまっている。そして、その輪から鎖が伸びて、ベッドのヘッドボードにぐるぐると巻きつけられていた。

羽宮はようやく、自分がベッドに寝かされていることを知る。そして、両手に手錠をかけられ、ベッドから離れられないどころか、ほぼ体を動かさないことも。

ぞわり。

背筋を恐怖が走った。これをやったのは、まちがいなく春宮だ。羽宮が逃げないように、こんなにかっちり拘束したのだとすると、羽宮がきちんとした答えを出すまで許さないつもりなのだろう。

だとしたら、腹をくくるしかない。

だって、春宮の気持ちには応えられない。

春宮を傷つけない。せっかくの二十歳の誕生日なんだから、いい気分のままでいさせてやりたい。

羽宮には、その気持ちがずっとあった。

いつかはきちんと拒絶しなければならぬとしても、こんな忙しくて心に余裕がないときじゃなくて、もっと落ち着いたときにしたかった。

だって、仕事のことで頭がいっぱいなのに春宮に横柄な口調で何か言われたら、カッとなってしまうかもしれない。それで、思ってもないことを口にしてしまい、春宮を完膚なきまでたたきのめす可能性だってある。

春宮はかわいい弟で、かけがえのない家族だ。

それだけは、一生変わらない。

だから、穏やかな話し合いをしたかった。そういうことはできないんだよ、でも、これからも仲のいい兄弟でいようね、と羽宮が心から思っていることを、春宮にどうにか理解してほしかった。

誕生日当日にこの件に決着をつけて、春宮を落ち込ませたくない。

それも、羽宮の中にある本当の気持ちで。だから、悪手だとわかっていながらも、千夏を連れてきた。

結果、千夏に軽蔑され、ふられ、母親を怒らせて、誕生パーティーを台無しにしてしまったけれど、春宮が羽宮の拒絶の言葉を聞かないですむならそれでもいい、と、さっき家に戻りながら考えていたほどだ。

なのに、春宮は無理に答えを聞きだそうとしている。

だとすれば、もう、春宮を傷つけずに穏便に済ませる、という選択肢はなくなった。

羽宮はふっと体から力を抜いて、ぼすん、と布団に背をつけた。こんな中途半端な姿勢でいると、体がつらいだけだ。

「春宮」

羽宮は春宮を呼ぶ。これまでとはちがう、確固とした意思を持って。

「なんだ」

それを感じとったのか、ようやく春宮が羽宮の視界に入ってきた。

「お誕生日おめでとう」

もしかしたら、お祝いができるのは今日が最後かもしれない。これから先、春宮と普通に会話することすらできなくなるかもしれない。

だから、まず最初にそう口にした。

二十歳になった。成人した。大人としての権利を認められる。

それは、本当にいいことだと思うから。

「サンキュ」

春宮も普通に答える。

「あと、手錠ほどいて」

これは、断固とした口調で。

そうしなければ許さないよ。

兄としての威厳も込めながら。

なのに。

「やだよ」

春宮は、あっさり却下する。

「せっかくないだのに、ほどくわけねえだろ」

「ちゃんと答えるから」

羽宮はじっと春宮を見た。

「春宮が知りたいこと、全部にちゃんと答えを出すから」

「いらねえよ」

春宮の言ったことの意味が、最初はよくわからなかった。しばらく反芻してから、断られたんだ、と理解する。

「...え？」

羽宮は首をかしげた。

なんで？ ずっと、答えを出せ、って言ってたくせに。

「あの女を連れてきたってことは、つまり、ぼくにはつきあってる彼女がいるから、春宮の気持ちには

応えられないよ、察してね、ってことだろ」

春宮の言葉に、羽宮は目を伏せた。たしかに、そのつもりだったが、改めて言われると卑怯な作戦だったな、と思い知らされる。

でも、それ以外が思いつかなかった。

羽宮としては、最善をつくしたのだ。

「けど、察してなんかやらねえよ」

春宮がにやりと笑う。

「もともと、羽宮が俺を受け入れるなんて考えたことねえからな」

「は...？」

羽宮はぱちぱちと目をまたたかせた。

「おまえが二十歳になるまでには、きっと考えが変わってるよ。そんなふうには俺の本気を疑う羽宮は、俺がどれだけ我慢してるのか気づきもしない。二十歳になったらなったで、その場で言い逃れをすればいいと思ってる。おまえの考えてることを当ててやろうか」

ぎしっ。

そんな音がして、春宮がベッドに登った。

「ぼくたちは兄弟なんだよ」

指を一本立てる。

「血がつながってるのに、そんな感情を抱くなんておかしいよ」

二本目の指。

「ぼくにとって、春宮はいつまでもかわいい弟で大事な家族なんだ。それを失いたくない」

三本目も立った。

「こんなことをしたら、両親が悲しむよ。春宮だって、親を失望させたくないでしょ」

四本目を伸ばしてから、しばらく悩んで、ま、このぐらいかな、とつぶやく。

たしかに、春宮の言うとおりで。自分はそうやって考えている。そして、これはだれに聞いてもらってもいいが、絶対に羽宮が正しい。

血がつながった兄弟同士で、好きだなんだ、って、おかしいに決まってる。

「けど、俺からしたら」

そこで、春宮は、ふっ、と指に息をふきかけた。指が全部、きれいにもとの位置に戻る。

「それがどうした、くそくらえ。こっちだって、悩まなかったわけじゃねえんだよ。それでも、考えに考えた結果、羽宮しかいらないう結論になったんだ。ほら、よく言うだろ。神様は運命の人に出会えるように、いろんな偶然をつくる、ってな」

そんなことわざみたいなの、知らない。

そして、羽宮が予防線として持っていたものすべてを瞬時にたたき壊されて、体の中に恐怖が這いあがってくる。

春宮は本気なのだ。

羽宮が想像した以上に、真剣なのだ。

もはや、羽宮の気持ちなんてどうでもいい、というところまできている。

だとしたら...

この先を想像しただけで、鳥肌が立った。

...春宮を止めることなんて、できないのかもしれない。

「ホントは、裸にひんむいて寝かせておこうかと思った」

春宮は羽宮に徐々に近づいてくる。そのゆっくりした動きが、いやが上にも羽宮の恐怖をあおる。

「けど、やっぱり、服を脱がされたときの羽宮の表情も見てえな、って。十年も、想像だけですませてきたんだ。やっぱり、初めてのときは楽しまないとな」

「やだっ...！」

羽宮はそのとき初めて、この手錠の意味を知った。答えを出させるためじゃない。もっとちがう意味があるのだと、ようやく理解した。

春宮は、この場で羽宮を襲うつもりなのだ。

「いやだっ...！ 春宮...ぼくたちは兄弟なんだよっ...！」

きっと、春宮には届かない。相当の覚悟を決めたからこそ、こうやって羽宮を縛っている。

だけど、何かを言わずにはいられなかった。それも、できるだけ大声で。

明るすぎて全貌が見えないし、告白されて以来、密室で二人きりになるのを避けるために入ったことはないけれど、ここは春宮の部屋だろう。両親の寝室とは離れているとはいえ、声をからして騒いでいたら、もしかしたら気づいてくれるかもしれない。

何もしないよりはマシだ。

そんな羽宮の希望を、春宮は打ち砕く。

「いくらでも叫んでいいぞ。ここ、地下だしな。防音は完璧なんだよ」

ガン、と頭を殴られたような衝撃を受けた。地下室があることなんて、すっかり忘れていた。だって、春宮だってしばらく使っていない。

そして、春宮の言うとおりに、ここは楽器の練習をしてもその音が漏れないように、完全防音になっている。

ここで叫んでも、ただ壁が羽宮の声を吸収するだけ。親どころか、すぐ外にすら届かない。

「まさか...このために...」

「いや、さすがにそれは」

春宮が苦笑する。

「あのときは、ちゃんとバンドやりたかったんだよ。けど、俺、音楽の素養がねえからさ、練習してもある程度以上はうまくなんねえし、よく考えたら、プロになるわけでもないのに、ここまでがんばらなくてもいいか、ってなったら、しゅるるる、って、バンドやりたい熱が冷めた」

よかった、と羽宮はほっとした。羽宮をこんなふう閉じ込めるために、とんでもない大金をかけて地下室を作らせたとなると、さすがに両親に申し訳なさすぎる。

このぐらいのお金がなくなったところで、親にとっては痛くもかゆくもないんだろうけど、社会人になると、一ヶ月、がんばって働いてもこの給料か、というのがわかるので、お金に対してはとても謙虚な

気持ちになる。

「けど、こうやって再利用できたわけだし、あのときバンドやりたかって思った俺ってえらいよな」  
春宮は、うんうん、とうなずいた。

「バッカじゃないのっ！」

羽宮は思わず、大声を出す。これは、だれかに助けを求めたいとかじゃなくて、心からの叫びだ。

「ぼくをどうにかしたいためだけに、ここにベッドを持ちこんで、手錠買って、ぼくを気絶させて、ベッドに縛りつけて！ 本当にそんなことがしたいの!?!? ぼくとの兄弟関係を壊したいの!?!? 踏み出したら戻れないんだよっ！」

このあと、羽宮が想像していることが行われるとしたら、兄弟という枠には戻れなくなる。

羽宮は春宮を徹底的に避ける。なんなら、明日、引っ越してもいい。

春宮も成人したことだし、社会勉強のために一人暮らしをしたいんだ。

笑顔でそう告げたら、母親は反対するかもしれないが父親はわかってくれるだろう。もし、二人が反対しても、無理に出ていけばいい。

もうこの年齢なのだ。自分で自分の行動を決められる。

「だれが戻りたいって言ったよ」

春宮は不遜な表情を浮かべた。

「俺はずっと言ってるよな？ おまえのことが好きだ、おまえを俺のものにしたい、兄弟なんてどうでもいい、羽宮個人としておまえを愛してる、って」

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>